



一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301 号

〒169-0051 TEL:03-3204-0595 (FAX 兼用)

E-mail:gsj20@m7.dion.ne.jp URL:https://nitteikyou.org/

発行者：会長 高橋 康夫

編集者：広報委員長 小沼 康子

題 字：上原 敬二

発行日：2022 (令和 4) 年 7 月 15 日

「いいね！雑木の庭」 中村さん、掃除をしなくていい庭を作って！

中村 寛

飯田十基のもとでの修業時代は、落葉一枚も残さず小箒で掃除。雑木の庭ですから年の暮れにそれをすれば、一年中ほとんどきれいなのです。そして、私も独立して雑木の庭をつくって40年を越えました。お施主さんも歳を重ね、それほど庭にお金をかけられなくなると、今度は3年おき位の手入れになります。そうすると落葉が堆積し、雑草も生えにくくなり、それなりに枯れたいい感じの庭になります。

世間では、植木屋が手入れをすれば木が良くなると思っている



掃除しなくてもよい庭 高低差のある敷地を活かした庭。竣工から20年がたち、緑に包まれた庭は夏でも涼しい。(横浜市 相沢邸)



1948年生まれ。東京都出身。構木造園、多磨植木、飯田造園設計事務所を経て、1978年、作庭処中村庭苑設立。1991年、掃除しなくてもよい雑木の庭、1998年頃より都内の再開発で破棄された大谷石で庭をつくりはじめる。2012年、大規模開発された造成地内の斜面に森を計画し、育成中。2017年、個人的に雑草の庭を模索中。

人がほとんどですが、特に雑木類は手入れすればするほど、みにくくなります。ですから3年から5年位に一度、どかんと枝をおろせばそれで完了。雑木の庭は経済的です。お施主さんの要望に私はこう答えました。「任せてください。そういう庭を作るの得意ですから」と、木をいっぱい植えました。

外に散らばる落葉はゴミではありません。風にまかせましょう。排水溝につまる落葉の処理はお役所にまかせましょう。それを木の所有者の責任だと言う役人ほど「みどり」が大切だと言いたがる

ものです。みどりの何とか条例だとか、グリコのおまけみたいな補助はやめて、町の清掃に予算をつけてください。きつと木を植える人が増え、掃除ができず泣く泣く木を切る人もいなくなると思います。そして、植木屋は庭をつくったらお施主さんに木の手入れを伝授しましょう。そのうち、ますます庭に愛着をもち、庭にゴザを敷いて弁当を食べ、日がな一日、鳥のさえずりを聴き、おだやかな日々を過ごせるようになります。鳥の好む実の成る木もお忘れなく挿んで植えてあげてください。肩肘張らず、お施主さんに寄り添ったこんな庭もよいのではないのでしょうか。

(監事)

第2回 齊藤勝雄さいとうかつお

講座開催にあたって

日本庭園協会は100年以上続く庭園の団体で、日本の庭の魅力を伝え、庭園の技術を継承したいという目的で、運営しています。

本講座は、昭和時代に活躍なさった先輩たちで当協会に関わりの深い方々について、今一度思い起こそうということで開催しております。

第1回は岩城巨太郎先生（108号掲載）、本日は第2回として齊藤勝雄先生の足跡を振り返りたいと思います。お二人の講師の方をお招きしました。はじめは箱根植木株式会社の和田新也社長、次に当協会名誉会長の龍居竹之介先生にお話しいただきます。

龍居名誉会長の挨拶

和田新也社長は、ひとことと言ってよい人です。仕事もよくするし、まじめですし、私にとっても早稲田大学の素晴らしい後輩です。

箱根植木株式会社の顧問であり、

会社には欠かせない存在であった齊藤勝雄先生とは、新也氏のお父さんである先代社長の和田貞次さんの時から一緒に仕事をなされていました。今日はいろいろと話をお聞かせください。

【齊藤勝雄プロフィール】

1893（明治26）年—1987（昭和62）年。千葉県九十九里町生まれ。1908年尋常高等小学校卒業。庭師の父・権七に師事、家業の造園業に従事。日本国内から海外まで数々の日本庭園作品を手がける傍ら造園に関する執筆著作を多く世に送り出す。箱根植木株式会社など造園会社の顧問なども務めた。代表作は、ホテルパシフィック東京の庭園（1971年）、館林文化会館の庭園（1972年）ほか。主な著書は、処女作『庭木整姿法』（成美堂、1922年）、『造園実務集成・庭園篇1、2、3』（技報堂、1972〜73年）、『齊藤勝雄作庭技法集成・第1〜5巻』（河出書房新社、1976〜78年）ほか多数。1969年、日本造園学会賞受賞。



私が知る齊藤勝雄先生

和田新也（箱根植木株式会社）

私は、齊藤勝雄先生の晩年、89歳から91歳の頃に一緒に過ごさせていただきました。今日は齊藤先生の略歴、人となり、当社との関わりと作品紹介という順でお話します。

齊藤勝雄先生の略歴

齊藤先生は、1893（明治26）年に生まれ、1987（昭和62）年に94歳で亡くなりました。最後まで

【和田新也プロフィール】



1954年生まれ、東京都出身。早稲田大学理工学部金属工学科卒業後、1980年ミシガン州立大学造園科卒業。EPI設計事務所勤務を経て、箱根植木株式会社入社。現在、箱根植木株式会社代表取締役。（二社）日本造園建設業協会会長。趣味…ゴルフ。座右の銘…上善如水。好きな庭園…殿ヶ谷戸庭園

本当にお元気でおられ、健康長寿でした。

15歳から庭師の父の下で修業を始めました。1921（大正10）年、28歳の時、東京帝国大学（現、東京大学）に持ち込んだ論文を、後に「国立公園の父」と言われた田村剛に認められました。齊藤先生は現場での施工が中心でしたが、多くの本も執筆していました。

齊藤先生は、小学生の頃、大変成績優秀で、本当は学者として身を立ってたかったそうです。学校を卒業後すぐに父の下で庭師の修業に入りましたが、学者としての志向が捨てきれずに、本をたくさん読んで文章を書いていました。書いては出版社に持ち込みますが、なかなか取り合ってもらえない。ところが、田村に出版社を紹介されてから出版できるようになったということです。

一時、小川治兵衛の下で修業し、龍居松之助や上原敬二の薫陶も受けました。当初は施工職人、親方として仕事をしていました。その後、設

計監理を専門とするようになりました。設計監理の方が生まれつきの性格にあっているということでした。結局、親方をやっている、その仕事で金を儲けなければいけない。植木屋としては当然のことですが、金儲けはとても苦手なので、設計監理一辺倒でいくのだと、著書にあります。

齊藤先生の多くの著書には序文として田村の言葉が寄せられています。1964（昭和39）年、先に英文で発刊され、和文が1970（昭和45）年に出された『日本庭園の秘法（註）』の序文で田村は、「自分たちは師弟の関係」と書いています。

自分が師匠で齊藤先生が弟子だということを明確に書いています。序文には、当初、期待していたのは、齊藤先生の「得意とする造園施工に関する実際の記述であった。それにも関わらず、造園に関する理論を深く追求しようとする同君の真摯な努力により今日の地位を築くに至ったことは、期待以上であった」と記されています。先ほど話したように小学校で優秀であったことから、現場での施工の話だけではなく理論まで深く勉強されていることの証であったということだと思います。

人となり

齊藤先生は、常に凛として、ぴちっとした身なりをされていました。若い頃の私は、現場よりも寄り合いや会議でお会いする機会が多かったのですが、様々な会で先生は必ず舞を舞われるのです。しかもスーツを着てこられて、紋付袴に着替えてから舞う、時間がないときもきちっと舞ってくださるのです。当社の新年会や職人方の結婚式でも舞ってくださいました（図1）。

穏やかで、周りへの気遣いもきちんとなさる方でした。繰り返しますが、人となりは常に飄々と、そして、しばしば軽妙洒脱。現場の指導でも、大きな声で叱責したり、何か言うということはほとんど聞いたことはありません。「だめだ」とは言わず、「ほうほうほう」とか、「ここはこう」といった感じ、飄々と指導していました。文章



図1 紋付袴で舞う齊藤勝雄先生

では非常に多くを語り、且つ軽妙ですが、普段は口数が少なく、嬉しうに図面に向かっていたり、現場を見ておられていました（図2）。初期のころは、矢立に筆を入れて現場でイメージスケッチを描き、指導していました。写真（図3）にあるように、いつも、後ろ手を組んで、石組を指導する姿が非常に先生らしい、というのが私の印象です。

箱根植木との関わり

当社の創業者である私の父和田貞次が勤めていた「新宿ガーデン」という会社での出会いが齊藤先生と当社の関わりの始まりです。「新宿ガー



図2 図面を手に庭を見る齊藤勝雄先生

デン」は、戦後、これからは「緑だ」ということで、1949（昭和24）年に浜野一郎という方が設立した造園会社です。その際に、齊藤先生は造園のオーソリティーとして、父は園芸部門の担当として招聘されました。

1953（昭和28）年に父が箱根植木を設立したときから、齊藤先生に技術顧問として、国内外の多くの造園工事の設計監理の指導をいただいていた。海外への道筋も齊藤先生に付けていただいて、現在に至っています。

作品紹介

海外の2作品、国内の2作品を紹介いたします。

○Swiss Pines Park
米国・ペンシルベニア州、1971（昭和46）年



図3 施工中のピースガーデンで後ろ手を組み指導する齊藤勝雄先生

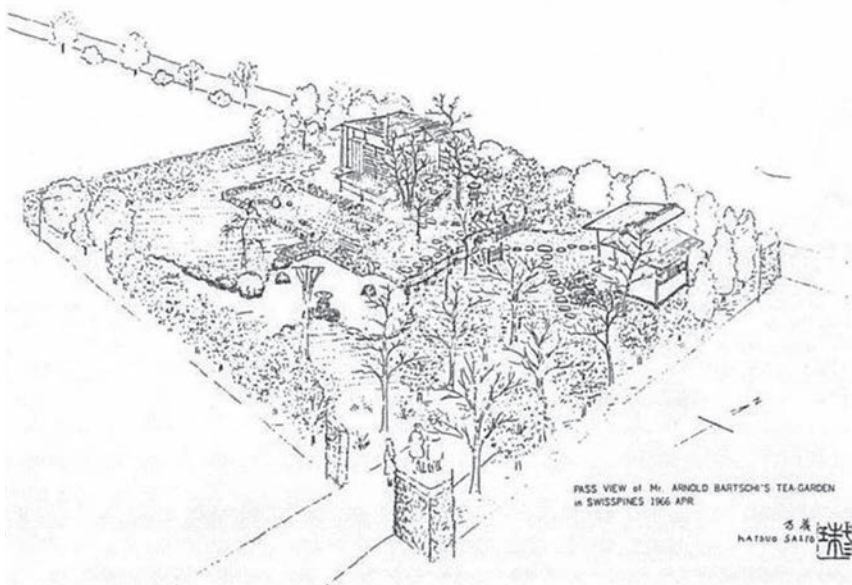


図5 スイス・パインパーク 内露地のイメージスケッチ

齊藤先生が実際脚立に上って剪定作業をしている珍しい写真(図4)があります。だいたい齊藤先生は指導のみで、手入は職人がするので、手が、海外で人手が足りなかったのかと思います。齊藤先生は、図5のようなイメージスケッチを描いて指示するパターンが多かったです。もちろん平面図も描きますが、パースは必ず描いています。図6の写真は、6万㎡の庭のうちの露地を改修した作品です。



図4 スイス・パインパークで自ら剪定指導する齊藤勝雄先生(右)



図6 改修後のスイス・パインパーク内露地 1971

○ピースガーデン
スイス・ジュネーブ、1971(昭和46)年



図8 竣工時のピースガーデン

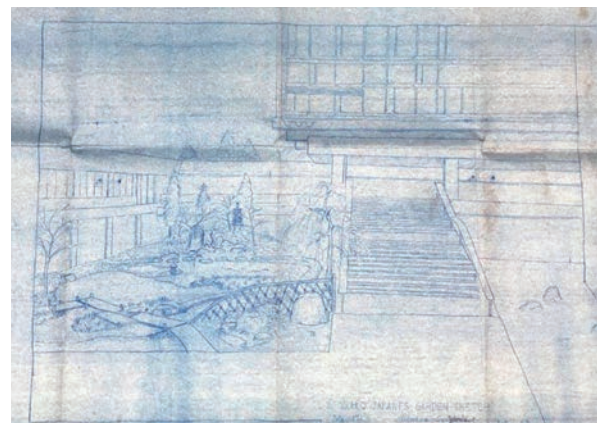


図7 ピースガーデンのイメージスケッチ

○ホテルパシフィック東京の庭
東京都港区、1971(昭和46)年
この庭園は、残念ながらもうすぐ

WHO(世界保健機構)本部の日本庭園、ピースガーデンのイメージスケッチ(図7)です。この庭は、WHO本部の敷地内にありますので、一般公開されていません。大まかな平面図とイメージスケッチをもとに、立体感のある滝石組・流れを持つ、平和をテーマとした庭を作りました(図8)。



図9 レストランから望む大滝 ホテルパシフィック東京 1975

取り壊されてしまいます。ロビーからの眺めも今は見ることはできません。この時は、建築側で先に滝の位置や深さが決まってしまうので、いかにこれを自然に見せるかということで大変苦心したようですが、ダイナミックな滝になりました(図9)。

○加古川市庁舎前の庭「鹿児の庭」
兵庫県加古川市、1973(昭和48)年

こちらの庭はしっかりと残っています。この庭園にはクロマツが700本(図10)くらいあり、関東風の手入れをするようにということで、竣工当初から6、7年は私どもの職



図10 鹿児の庭 関東風の手入れのクロマツ 1973

人が行って管理をしていました。ところが、東京から出向くには様々な困難が伴い、10年くらい経って、残

念ながら管理を断念せざるを得ませんでした。

施工当初(図11)と3年ほど前の



図11 鹿児の庭 竣工時 1973

庭の写真(図12)があります。その後もしっかりとメンテナンスしていただいて非常にありがたいことです。

○農大二高の庭
群馬県高崎市、1966(昭和41)年

この場所には校舎が建ってしまつて、今はありません。斉藤先生の作品としてはあり得ないような石組(図13)でした。斉藤先生のことをご存じの方はこんなことするわけないと言われるかもしれません。確かに斉藤先生の作品です。斉藤先生によると次のように述べています。

グラウンドよりも一段高く、平野を見下ろし、はるか彼方に遠山を臨む環境にある。(中略)この岩石は以前草津方面から搬入され現場にあった石を使った。模様の多い石であるがその模様たるやすこぶるグロテスクで一癖も二癖もありそうな石ばかりだ。どっしりと座るといよりは、うきうきと踊り上がりそうな石である。どうせ低く据えようとしても、酔っ払いに正座を強いるようなものなので、落ち着いた気持ちの石



図13 農大二高の庭 斉藤作品とは思えないような石組

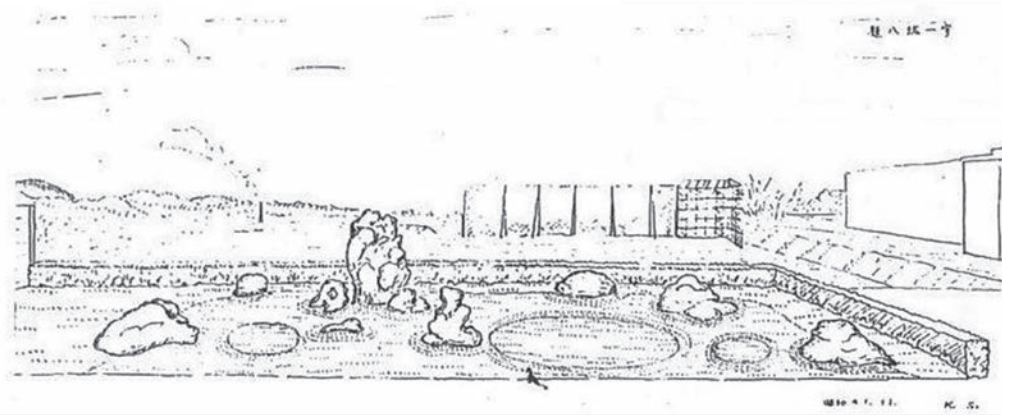


図14 農大二高の庭のイメージスケッチ

組になりそうにない。一層のこと、浮き立ちそうな氣勢を利用して、この天地よりはるかな環境の中へ、八紘をもって一字となすような意気軒昂たる石組をやってみてはどうか。根を深くするような石組の常識からいって、きわめて型破りである。ロケットは上の空に向かって突進す

るからこそ価値があるのである(註2)。

なるほどと思います。しかもそれが高校だということがみそで、高校生に對してのメッセージです。どんな行け、好きなどころへ飛び出して行け、という非常に面白い自由奔放な作品コンセプトでつくっています。「少年よ、大志を抱け」というようににどんな出ていきなさい、やりたいことはやっていけという石組だと思っています。このような斉藤作品(図14)は他には見られません。

おわりに

最後に、斉藤先生の語録を紹介し
ます。

造園関係社会は、人間社会の一コマであるから、一般社会情勢の動きと無関係であり得ない。そして、大筋から言えば、造園関係業務は景気上昇の場合は一番後について浮上し、いわゆる好景気の後輪を拝することとなる。景気下降の場合には、その不景気の一審槍を賜る、なんと割の悪い職域であり、緑化によって地球の寿命を延ばし、庭園の風格によって人格形成に貢献するという大儀名分を振りかざしてみたところで、これはどうにもならない(註3)。

現在にもまったく通じるもので、「イライラするな」と言っています。もう一つ、先生は若手にあくまで現場で指導するのが中心でした。後年には、こんな言葉を残しています。

暖簾に腕押しのもなしさを感じることがある。現場での指導は全身の細胞が奮い立って実に快感を覚える。それでも、書物により伝達ができない方法であっても、できる限りの努力をすることが後継者たちへの義務であり、おそらく作庭記も同じような気持ちで作られたのではない(註4)。

確かに現場指導が庭づくりの基本であるが、やはり書物に言葉として残しておくことも自分たちの責務だと言っています。

今回の機会をいただき、改めて勉強してみると、実体験や人づてに聞くことと書物を調べることで、それらが合わさって初めて実像が見えてきます。現場での口伝だけではなく書物としてしっかり残しておこうという斉藤先生の気持ち少し理解できた気がします。

今日、紹介したのは、斉藤先生が70歳代から80歳直前までにつくられ

た作品です。書物もそのころに大量に書かれておられます。作品のピークは70歳代だったといえるかとも思っています。

斉藤先生と同年代の方々である、龍居松之助(1884-1961)、上原敬二(1889-1981)、飯田十基(1890-1979)、田村剛(1890-1979)、岩城巨太郎(1898-1988)は皆さん長寿です。当時のそうそうたる巨匠の方々は長寿、しかも健康長寿でした。いかに「造園」というものは人間の心身に良いかということとを自ら証明されているのです。皆さんも健康で長生きされ、ますますご活躍ください。

(文中、敬称略とさせていただきます)

註1… 斉藤勝雄・和田貞次著『日本庭園の秘法』日貿出版社、1970

註2… 30周年記念誌編集委員会編『箱根植木30周年史』箱根植木、1985

註3… 斉藤勝雄著『斉藤勝雄作庭技法集成 第四巻 庭工事段取と労務』、河出書房新社、1978

註4… 斉藤勝雄著『斉藤勝雄作庭技法集成 第一巻 日本庭園伝統の基盤』、河出書房新社、1976

写真・スケッチ… 全て箱根植木株式会社提供

私が知り、私が思ったところの齊藤勝雄の人と仕事

龍居 竹之介（名誉会長）



はじめに

一言でいうと、齊

藤勝雄（1893-1987）という人は実直です。実直ですけれど自信家です。その実直さも何もかも、生来の勉強家というところから出発しています。これが並の庭師ではありません。ちょっと特殊な人だと思います。ですから、後輩たちにはありがたい先生と思われていて、ある意味、指導者としては、身に付いたものがあつたのだと思います。では、同業者の間ではどうだったかという、私としては「さあ？」としか言えません。つまり、勉強家すぎて、同業者からみれば「学者の真似をして」と、常にどこからか言われていました。でも、根っからの勉強家でしたから、しょうがないのだと私は思っていました。勉強家であり、いろいろなことに興味を持っていました。庭の世界だけではなく、様々なことに興味を持っていたことが大きく成功する人の底力なんだろうと思います。

1. ちょっと普通の親方と違った 雰囲気の人

昭和10年代に入った頃、子供だった私の目に映った齊藤は、いつもにこやかで、やさしい好々爺でした。我が家によく見えていました。なぜかという、日本庭園協会（註1）の機関誌『庭園』の編集メンバーだったからでした。当協会の事務局を私の父、龍居松之助（1884-1961）が長いことやっていて、編集メンバーも出入りしていました。詳しいことが分かったのは、後の話ですが、その頃は、『庭園』の編集をするために来ていたとは、全然感じませんでした。そういう面でもちょっと異質ではあつたわけです。ただ、子供の目から見ると、同じように出入りしている庭師とは、ちょっと様子が違うことは、うすうす感じていました。てっきり、仕事のことで見えた庭師や植木屋の親方の一人かと思っていました。実は違っていたのです。

齊藤がこの頃を回想して書いた文章が残っております。

昭和36年、父松之助がなくなり、

追悼の催しで追悼文集を作りました。その中で、齊藤が書いた一節です。

私が直接龍居先生の御指導を受けたのは、昔の庭園協会発行の雑誌『庭園』の編集を担当していた頃のことであつた。首席であつたとは云え田舎の小学を卒業しただけの私が、最高学府大学卒の大勢居られる庭園協会の機関誌を編集するのであるから、まるで間違いに刃物を持たせるようにあぶないことであつたが、それを大過なく乗り切らせたのは、実に龍居先生の御指導宜しきを得た賜物であつたと思う。

確かに、植木屋の親方が『庭園』の編集を任されていることは、当時では考えられなかったのではないでしょう。か。編集は、当時、松之助が校長をしていた東京高等造園学校（現東京農業大学造園科学科）の卒業生の方々が行っていた経緯があります。そこに、現場の職人である齊藤が入っているというのは、珍しいことでした。

齊藤にとって、若い頃に『庭園』の編集を担ったということは、大変思い出深かつたわけ。大学関係の人たちと、小学校しか出ていない自分が一緒に編集しているというこ

とは、非常に嬉しいことだったと思います。これがある意味で、齊藤にとって、一つの売り物であつたのではないかとも思います。

このように普通の庭師とはいささか異なる雰囲気、我が家をよく姿を見かける齊藤にはあつたのです。私も年を重ねるに従って、齊藤の妻さがわかってきたのが、田村剛（1890-1979）との出会いの話です。

田村は、庭園協会の創立メンバーの中心にいた人物の一人です。庭園協会は、上原敬二（1889-1981）が先頭にたつて旗を振り、それに田村や松之助などが力を合わせて手伝っていた会でした。庭園協会の生みの親の一人であつた田村との出会いが、齊藤には大きな影響を与えたということです。

聞けば、当時の東京帝国大学つまり現在の東京大学に齊藤は論文を送りました。ところが一生懸命勉強して、庭のことについて自分の考えをまとめて送ったのですが、なんの音沙汰もなかった。これって、実は大学の方でも困っていたのだと思います。突然、植木屋のせがれが庭のことを調べて書いたものを送って来られてもね。結局、大学には届いたものの教室のどこかに眠っていたよう

です。送った当人は気にしていませんが、何の連絡も来ない。あきらめていたんでしょう。気持ちがどん底になっていたところに、ふっと、一通の手紙が届きました。その手紙の差出人が田村だったのです。

その内容は、「大変はじめに勉強し、考えて書いたものを、大学は良いも悪いも評価なしに放り出していい。私がそれを見つけて読んだところ、あなたの書かれたものだった。長い間眠らせていて、申し訳なかった」と大学の非礼を謝った上、「これから君は君らしい考え方で研究に頑張るなさい」と激励したものでした。

斉藤にとって天にも昇る気持ちだったでしょう。すぐに田村に連絡し、「ありがとうございます」と礼を言ったのが始まりで、その後、田村が1979（昭和54）年に亡くなるまで、本当に実直に仕えました。田村のことになると、全く人がちがってしまい、崇拜しているという感じでした。

その後、斉藤は数多く本を出しますが、その本の序文は、ほとんど田村が書いています。序文を書いてくれるというのはなかなかできないことですが、田村と斉藤には強いつながりがあったようです。斉藤はもと

もと勉強好きでしたが、東京大学の先生に認められたということで、さらに勉強しなくては、という思いに駆られたということのようです。結果的にそれが、大きい仕事をする原動力になったわけです。

しかし、人間とは不思議なもので、崇拜する田村について、斉藤にも悩みがありました。ある時、こんな話を聞きました。「田村先生の仕事をお手伝いするのはありがたいことなんです。だけど、先生は平面図しかくれない。スケッチの一枚もくれないといいたけれど、言えない。言えないから、平面図一枚から、自分なりに一所懸命考えてやっている」と。こういうところに困っていたのかと思いました。

田村は、庭を勉強している人の中で、自分が見込んだ人の大変力になり、中でも特に二人の人物を応援しました。一人は斉藤です。そして、もう一人、田村が見出して応援し、大成した人がいます。それは皆さんご存じの重森三玲（1896-1975）です。重森を世に出したのは田村です。

重森の話にちょっと触れます。重森は岡山の自宅に自分で庭をつくり、それを東京の先生方に見てほしいと何人かに連絡しました。丁度、

岡山方面に出張したのが田村でした。お願いした先生とは違いましたが、見ていただければありがたいということ、田村を迎えたのでした。

その庭を見た田村は、これはできる人だと見抜き、「あんだ、頑張りなさいよ」と、励ましたというのです。これが、東京の先生が重森を認めた最初でした。以後、田村は重森を大変、応援していました。

もう一人、重森に関心を抱いていたのは私の父、松之助です。この二人が、重森に早くから注目していたようでした。

2. 学者庭師としての誇り

先生方との付き合いが深まれば、当然自信もついてくる。さらに勉強をと、言われるのですから、張り切って守ります。まじめな方ですから、本当は、学者になりたかったのではないのでしょうか。

斉藤自身は、口では学歴がない、小学校だけだと言っていました。勉強については自負するところが多く、終生努力に欠けるころはありませんでした。ですから晩年には「勉強が大嫌いな父親の手元で育って、独学の道を進んだのが私。自分のおやじは勉強が大嫌い。だけど自分は勉強した。そしてわが子は学位を得

て千葉大学で教授を務めました。こんな喜びを味わえて幸せでした」と語っていました。私は、このセリフを何回も聞いています。一度は、九十九里のご自宅でした。ご子息、斉藤一雄の学位記が壁に掛けられている座敷でした。どこからでも見えるように飾られた学位記の前まで行って、「うちの息子は」と話す表情は、一段と輝いて、学者庭師の面目躍如でした。素直にそう言って喜びを味わえて幸せな人でした。その顔の輝きから、本当は自分がそうなりたかったのだらうとも思われました。

3. 内に秘めた負けん気の強さ

斉藤の負けん気が強いのは間違いないかもしれません。若い頃の話です。京都で勉強のために「植治^(註2)」に身を寄せた時を振り返って、しみじみ話します。「食事の席もきっちり決まっております。親方の一家は上段席、私らは下段だ。若い時の岩城巨太郎さんは親戚だからもちろん上段で私より上。ちよつとはうらやましかつたけれど、まずは勉強だと思ったら気にならなかった」と言っていました。岩城の方は、照れて困ったような顔をしていました。「植治」と言えば名のある親方ですから、当時、地方からたくさんの人が「植治」の門を叩

いて集まってきました。その中で、岩城が氣にしたのは、新潟から出てきていた田中泰治（後に田中泰阿弥）でした。越後生れの田中も「植治」で厄介になっていました。岩城は、最初から田中に感じるものはあったようです。岩城の晩年、「日本で茶庭がちゃんとできるのは何人いると思う？まあ、おれと田中だけだな」と、盛んに言っていました。この自信はすごいと思います。岩城から名前が出たのは田中だけで、「親戚でもうらやましくないや」と言いつつ気にしていた斉藤については、岩城はあまりふれていません。

斉藤が30歳前後の頃、東京の仲間内で「茶呑もう会」という集まりがありました。根岸の親方松本幾次郎や飯田十基、柴田集花園といった東京の植木屋が集まって「お茶を飲もう」という会でした。ある時、飯田が斉藤に向かって「植木屋が学者みたいな真似をするもんじゃないよ」と正面切って言ったそうです。しかし、斉藤は全然取り合わなかったそうです。なにを言われようが自分の信念を通す。同業者から面と向かって言われても平気だという芯の強さは、斉藤の人間の大きさなのかも知れません。

また、ある日には、「岩城亘太郎

さんは財産家だからお能の稽古にしても、ちゃんと装束をつけて能舞台に上がって舞うことができる。私は貧乏人だからそれは無理。でも、私だって観世流をしっかり習っているから、仕舞の一つも舞えるんだ。身に付けているんだ。仕舞の呼吸を庭つくり十分に役立てているんだ」と言っていました。

仕舞の話をしていると、立ち上がり、扇子をさっと下げて、ぱっと上げるといふ舞を見せる。それは何かと聞くと、「力は、上から打ち下ろした時に入れるのは普通だろう。だけれどそうではない。下ろした扇をぱっと上げる時、こちらに力を入れるんだ。つまり逆方向だ、逆方向の方が力が見えるんだ」と、説明されました。斉藤の作庭技法に「逆表現」とあります。ああそうか、斉藤が言っている「逆表現」というのは、こういうことだったのかと、その時、私は、ふっと氣付きました。逆表現の方が効果がある。木の植え方、石の据え方では、良い面を見せようとするより、むしろ悪い面をみせる。それも扱いようによつては、すごく良くなります。逆方向というのは、そういうことだと思いました。ついでに言うなら、斉藤が口にしていた庭をつくる上での考え方、テクニク

には3つの手法があります。「逆表現」、そして「艶消し」、「見え隠れ」です。なるほどと私は思いました。庭の仕事をしている人なら、端的にわかるのではないでしょうか。これが、斉藤の美学だと思います。

このように、日頃の勉強が応用のきく勉強になっていたと思います。何時代に、どこに何という庭ができましたという庭の歴史とか、単純に古い庭の本を見て、似て非なるものをつくるというのとはちよつと違ってきます。これは、斉藤の独特の生き方ではなかったのかと思います。

4. 地方での作庭技術実地指導での功労者

終戦後、上原敬二主導で「日本造園士会（註3）」が再発足したのをきっかけに、各地の会員の技量のばらつきを解消することが必要だということとが話題になりました。その指導をいつの間にか先導していたのが斉藤でした。

特に東北や北陸などに、斉藤の教えを受けてから、すっかり斉藤に傾倒する人が増えました。中には信奉者というに相應しい人も少なくありませんでした。自分の作品について、斉藤に批評してもらったとか、直してもらったというようなことを

嬉しそうに話す年配の植木屋があちこちにいたものです。

1965（昭和40）年前後、特にそのつながりの強さが感じられた氣がしました。ある意味、戦後の造園の世界の復興に大變力を貸し、大きな業績を残したのが斉藤であつたということです。

5. 伝統というものの考え方が独特でぶれない人

この話をするのは難しいと思っています。斉藤の著書を読むのが一番です。

斉藤の頭にある「庭における伝統」への考え方は浅薄な学者以上です。著作（註4）の一端から引用します。

伝統とは、読んで字の如く、根幹的な大すじが歴史的に連綿と生き続けながら伝わっているもののいいである。昔は生きていても途中で死に絶えてしまったものは伝統ではない。大すじは歴史的に体得者へ伝わっていても、その枝葉末節は時代の進運と共に捨て去られて、何世紀かの後には、影も形もなくなってしまうものである。真の伝統というのは、何時まで経ってもその時代において常に新鮮であり、浮調子でない流行の最先端をきるものであり、

従って亡びるなどということはあり得ないものでなければならぬ。それにはそれを受け継ぐ人達が、伝統の根幹と、枝葉末節とを混同することなく、正しく受け継いで行くことが要件とされる。

つまり、何でもかんでも古いものを伝統としてもしょうがないではないか、その時の現代において枝葉末節は切られても、どうということはない。本筋は、次へ次へとつながっていく。その時代、その時代にいつも通用するというのが、一番大事ということ。難しいですが、実際のところを抑えているのではないかと思います。続けて言います。

枝葉末節が次々に忘れられてゆくのは、伝統が失われてゆくのではなくて、本筋が正しく伸びてゆく過程における当然の自然淘汰である。

これも、言われればそうです。全てが大事なのですが、全てが伝統と云うてどうかということ。この齊藤流の考え方も一理あってわかりやすいと思います。

例えば筍は、たけのかわですっぽりと包まれながら育つ。けれどもや

がて竹が伸びゆくに従って、たけのかわは次々に脱ぎ捨てられて、幹の緑も節も美しく立派な竹の姿となると同じようなもので、竹稈は根幹大すじであり、たけのかわは枝葉末節に該当する。そのたけのかわを根幹大すじと思えば、竹稈を枝葉末節と早合点すれば、竹が滅びるように伝統も亡びることになる。

(中略)

この外、昔の日本庭園にあったからとて、自分の理性を欺き、普通りの真似をして、日本庭園の伝統を守ったと思うのは、とんでもない間違いで、学ぶべきは学び、捨つべきものは捨ててゆくのが、真に伝統を守るゆえんである。

歴史は文献と遺跡の綴り合わせであり、史論はその中の真実と真理を追求するものであり、伝統はその中から、不変、不朽のものを受け継いで、次代へリレーするもののいいである。

これが齊藤の考える伝統です。

今の庭の世界では、細かいことまでが伝統となっています。言ってみれば、齊藤の言うたけのかわと同じ話です。本当に重要なところは何かといったことも関係なしに、分別もなく、全て日本庭園は昔から立派

で、全て伝統文化だという考えが強いのではないのでしょうか。同じことを、言葉を変えて私も何度も言っている来ています。

齊藤は勉強の成果をこのように本に書き残しています。本当に立派だと思っています。私としては、齊藤に聞いてみたい。このたけのかわはどうすればいいのか、捨てられたたけのかわは救いようがないのか、という思いもしないではありません。

おわりに

いくら話しても齊藤の全体像はつかめません。茫漠としたところもあるし、非常に単刀直入のところもあります。結論的に言うと、齊藤の庭そのものにしても、私は好みなのとそうでないのがはつきりあります。何だろうか、よくわかりませんが、説明の仕方にもよるのではないかとといった感じもします。

一つ残念なのは、齊藤の後を継ぐ作庭者がいないことです。皆、技術には秀でていますが、感性とか、そういうところで、学ぶところの多い人でした。これが、私が考え、思い続けている齊藤勝雄という人です。

最後に、私が、齊藤のことで一番印象強いのは、齊藤が亡くなられた時のことです。子息の一雄から電話

があつて、「悪いけど弔辞をお願いします」と頼まりました。「なんで私が。いっぱい年寄りがいるじゃない」と言ったら、「僕は君が友人代表で一番ふさわしいと思っていますんだ」と言うのです。私はびっくり仰天しましたが、齊藤勝雄の友人代表ということ、弔辞をささげました。でも、嬉しかったです。思い返すと懐かしい。

(文中、敬称略とさせていただきます)

註1…1918(大正7)年、東京帝国大学林学科本多静六博士を中心に「庭園協会」の名称で創設された。1926(昭和元年、日本庭園協会に改称。

註2…近代日本庭園の先駆者とされる庭師七代目小川治兵衛の通称または屋号。

註3…1938(昭和13)年に、造園士という国家資格を目指して発会した職能団体。造園技術、造園材料などについて熱心に研修研究を実施したが、戦局の激化から自然休会となる。1974(昭和49)年、日本庭園協会と合併。

註4…齊藤勝雄著『齊藤勝雄作庭技法集成 第一巻 日本庭園伝統の基盤』、河出書房新社、1976

「みんなの緑学」

2022年度後期講座開催予告

「現代日本庭園の巨匠たち」その作庭手法と庭園観(第4回 小形研三)講師…(二社)日本庭園協会名誉会長 龍居竹之介

「長尾欽弥とよね」その人物と本宅・別荘の庭園を巡って」講師…長尾資料館 加藤映詳細が決まり次第、協会HPでお知らせします。

第2回 『都立庭園の冬支度の意匠』

きたむら ようこ
北村 葉子

2021 (令和3) 年11月28日 (日)

はじめに

本日は、「冬支度とは」「こも巻き、霜除けについて」「雪吊りについて」「門松、正月飾りについて」、最後に、東京都公園協会(以降、公園協会)が行っている「伝統技能の発信について」お話しします。途中、雪吊りの動画解説をご覧ください。

都立庭園は9ヶ所あり、そのすべてが文化財に指定されています。公園協会は、指定管理者としてこの都立庭園を管理しています。東京都は、浜離宮の御茶屋の整備や小石川後楽園の唐門の復元など、庭園の整

【北村 葉子プロフィール】



滋賀県出身。2009年、東京都公園協会に入社。旧岩崎邸庭園、文化財庭園係、庭園維持係と文化財庭園課で造園職6年間、管理系で7年間勤務。昨年度、旧芝離宮恩賜公園の所長をを1年間務め、現在、文化財庭園係長。

備指針を立てて整備改修しています。公園協会は日常の維持管理を主要としています。日々の手入れの中でも、東京都が定めている保存活用計画という整備指針に沿って日常の管理の中でも課題を解決していくような修景も行っております。

冬支度とは

冬支度とは、防寒、防雪を目的とした冬の植栽保護管理手法の一つです。わら囲い、ワラボッチ、敷葉(マツやラクウショウ)による植栽地の化粧と、ソテツの霜除け、わら巻きがあります。都立庭園での冬支度は、主に、冬に向けての「冬囲い」、「わら囲い」や「霜除け」、「雪吊り」のことと、お正月に向けた「正月飾り」、「門松」のことで、冬を迎えるにあたり設えることを指します。

こも巻き

こも巻き(図1)は、マツに施します。寒くなってくると、枝先にい

た害虫(マツカレハ)が、越冬するために幹を伝って地中に下りようとすると、の途中で捕まえるためにこもを幹に巻きます。こもが落ちないようにするため、上下2ヶ所に荒縄を結ぶのですが、上はゆるめ、下はきつめに結びます。すると害虫たちはその部分が暖かいため、また下の荒縄がきつく出口がないために、地面に下りずにこもの中で越冬します。春、虫たちが動き出す前に、こもを取り外して害虫とともに処分する、という昔ながらの害虫駆除の方法です。

縄の結び方には、「梅結び(図2)」という化粧結びがあります。マツに梅結び、松の根元にササがあれば松竹梅となります。大切なマツや、雪吊りを施したマツには梅結びを化粧結びとして行っております。

こも巻きは、害虫以外の益虫なども捕ってしまうので、現在、このこも巻きをしない所もあると思いますが、都立庭園では冬の庭園を演出する添景物として、毎年マツに行っております。

こういったこも巻きは、庭園を支



図1 こも巻き 稲田の風景(小石川後楽園)



図2 こも巻きの梅結び



図3 ソテツの霜除け－鎧(旧古河庭園)

えていただいている庭園作業ボランティアさんと一緒に行っています。

霜除け

霜除けとは、ソテツやバショウなどの寒さに弱い植物を防寒するため、にわら囲い、わら巻きを行うことです。こも巻きと同様に、冬の添景物として庭園に彩りを添えています。

都立庭園では、霜除けは、「鎧」と「巻きおろし」の2種類を展開しております。「鎧」の由来は、「鎧」を身に付けているように見えることからそう呼ばれています。そして「巻きおろし」というのは、シュロ縄を巻き下すことからそう呼ばれています。都立庭園で、実際に園内にソテツがあつて霜除けを施している庭園は、旧古河庭園と旧芝離宮恩賜庭園



図4 ソテツの霜除け－巻きおろし(旧芝離宮庭園)

の2庭園だけです。

「鎧」の作り方から見ていきましょう。旧古河庭園のソテツ(図3)です。年々弱ってきているので、傷めないように大事に行っております。

すぐったわらを丁寧の下から一段ずつ鎧状に巻いていきます。そして「ワラボッチ」をかぶせます。また、足下には「俵」と呼んでいるワラをのせて、黒シュロ縄で根元を化粧巻きしていきます。そしてマルチングとしてダイオウショウの落ち葉を敷いて完成になります。ダイオウショウの葉は、明るくて、普通の松葉より目立つので、添景物としては映える敷き葉になっています。

次に、「巻きおろし」です。旧芝離宮恩賜庭園のソテツ(図4)ですが、葉を枝折り、竹で骨格を作りま



図5 旧芝離宮庭園の古写真にみるソテツの霜除け
宮内庁書陵部蔵(一部拡大)

す。その上に、すぐったわらを下から上へ、ていねいに広げながらあてがっていき、「ワラボッチ」をかぶせます。最後に、黒シュロ縄で巻きおろし、化粧を行います。

明治時代の古写真(図5)を見ると現在と同じ位置にソテツの霜除けがありました。明治の頃から同じ位置にソテツが植えられており、霜除けが施されていたということがわかります。これをよく見てみると、頭がワラボッチではないということがわかります。

霜除けは、江戸時代の安藤広重や歌川国貞が描いた錦絵にも見られます。植木鉢の植物にも霜除けしていました。

向島百花園のバショウの頭飾りは、ワラボッチを最後に編み上げる

仕様です。特に向島百花園では、こういった江戸の風物詩を再現したお庭にすることを重要視しております。

雪吊り

現在、都立庭園では、11月から3月上旬の間、マツに雪吊りを施しています。東京では樹木の枝折れなどの被害が起きる程の積雪はありませんが、雪吊りを施すことで冬の庭園景観を演出しています。

1875(明治8)年頃に西洋リングの苗が石川県に導入され、リングの重さから枝を守るために縄を張った枝吊り方法が採用されました。兼六園では、この方法を庭園木に応用して、雪の重みから樹木を保護するため、明治の終わり頃から雪吊りが始まったとされています。そのため、兼六園式リング吊りとも呼ばれています。

雪吊りの構造と部分名称(図6)を紹介します。雪吊りを支えているのは、「帆柱」、「吊り縄」、「頭飾り」、「ばち(裾回し)」、「かんざし」です。

まずは、「帆柱」を幹に沿わせて結束します。その先端から枝にむけて、四方八方に均等な間隔でおろします。枝先に結ぶ縄を「吊り縄」と呼びます。この縄で、雪を散らして葉に積もった雪の重みによる枝折れ

や樹形の崩れを防止します。

帆柱の先には「頭飾り」を施しま

す。これは装飾的なもので、遊び心もあり、いろいろな形があります。

枝を直接吊り込まない場合は「かんざし」といって、丸竹を傘の骨組のように取り付けます。これは枝がないところの枝の役割をします。そして「ばち」と呼ばれる裾回しは、割り竹もしくはシュロ縄を一周回して、頭から出ている「吊り縄」を結び付けます。

東北や北陸地方に見られる雪吊りを比較しますと、頭飾りの違いや、帆柱の素材が竹または木と、その仕様は気候条件、都市と農村、庭園と

民家で異なり、多種多様な形があります。

雪吊りの種類は、吊り縄を下ろす代表的な「リング吊り」のほかに、帆柱を設置せずに幹から吊り縄を出す「幹吊り」も見られます。低木や株物に施す雪吊りとして、「竹又吊り」と「しほり」、「竹ばさみ」などがあります。

北に行けば行くほど雪との戦いになってきて、縄で吊っていない地域もあり、装飾よりも防雪の意味が強いというのが特徴です。

東京を中心とした関東一円の雪吊りは、当初は北陸や東北地方の雪国の手法にならつてはじめられたとさ

れますが、現在では実用的なものから、より優美な趣きのある雪吊りへと変化して、冬の庭園観賞の添景物として用いられています。

都立庭園では、「兼六園式」、「北部式」、「南部式」の3種類の雪吊りが設置されています。

北部式、南部式は、都立庭園に伝統的に設置されているオリ

ジナルの様式です。その名はかつて東京区部の都立公園の維持管理を東京都建設局所管の北部と南部公園緑地事務所で行っていたことに由来します。現在は東部公園緑地事務所に統一されていますが、分かれていたころに庭園管理を担当した農園芸技能主任を通して、この二つの手法が公園協会に受け継がれています。

「兼六園式」

の特徴は、直接木の枝を縄で吊り込むことです。「頭飾り」は、荒縄を巻き付けて飾いほ結びを施したものです。加賀藩の参勤交代の大名行列の先頭を飾る槍の穂先の鞘を模したものだと言われている。「北部式」の「頭飾り」は、ワラボッチをかぶせま

	兼六園式	北部式	南部式
外観			
頭飾り	荒縄巻と飾りいぼ結び 	ワラボッチ 	パレン 
ばち・裾回し	なし（直接枝に吊りこむ） 	割り竹 	棕櫚縄 

図7 兼六園式、北部式、南部式雪吊りの特徴

吊り込まずに割り竹を裾に一周回して吊り縄を結び付けます。

「南部式」の「頭飾り」は吊り縄を編み込んだ「ばれん」という装飾がされています。火消しのまといの上の部分に垂れ下げた飾り「ばれん」に形が似ていることから「ばれん」と呼ばれています。「裾回し」は、「北部式」は割り竹ですが、「南部

式」はシュロ縄を回します。シュロ縄がきれいな弧を描くように吊るのが南部式の特徴になります。

この兼六園式、北部式、南部式3種類の様式の外観、頭飾り、ばちの三つを比べました(図7)。

使用する縄の種類もそれぞれ違います。「兼六園式」では荒縄というわら縄を、北部式、南部式はイグサで編んだ内藤縄を使用します。

この雪吊りについての技能伝承研修を実施するにあたって、雪吊りに関する文献資料、過去に実施された雪吊りの研修資料や記録写真など史料資料・古写真などの情報収集を行いました。さらに、「仕様に関するヒアリング調査」を北部式、南部式についてそれぞれに詳しい文化財庭園課の農園芸職員を対象に行いました。

その結果、教わった人により仕様や部分名称の違いがわずかに見られたため、技能伝承研修の機会に名称を統一しました。「ばち」とか「かんざし」といつていた丸竹は「かんざし」に統一し、「ばち」とか「ぶち」と呼んでいた「裾回し」は「ばち」に統一しました。

実際の実地制作について説明します。

まず、帆柱、吊り縄、ばち用の割り竹と頭飾りを準備します。

最初に帆柱の高さを決めます。竹にシュロ縄を結んで、高さを変えながら色々な角度から検証して、帆柱の高さを決定します。樹高が同じマツでも、雪吊りを設置する場所、本数によって帆柱の高さは違ってきます。この帆柱の高さの決定には、熟練技能職員の美的感覚が大きく影響してきます。

続いて、吊り縄の準備をします。本数は円周と吊り縄のピッチから割り戻して決めていきます。小石川後楽園の内庭の大きな雪吊りには吊り縄を99本使いました。

北部式の場合、「ばち」に割り竹を使いますので、その準備をします。丸竹を竹割りで六つ割にして、ナタを使用して節を取ります。割り竹の厚さを均等にして面取りをします。

最後に頭飾りを作製します。北部式は「ワラボッチ」、南部式は吊り縄を編み込んで「ばれん」を作ります。

製作では伝承されてきた2通りの吊り縄の固定の様子を記録しました。また、過去の研修資料にあった「配り縄」ですが、絡まないようにまとめておく技法「鎖編み」も再現して確認記録を行っています。

製作にかかります。まず、帆柱を立てます。正面である頭飾りのワラ

ボッチの飾り結びの位置、帆柱の垂直を見極めます。

次に「かんざし」の取り付けですが、

北部式は裾回しの出来上がりをイメージした仮縄を回して、「かんざし」の位置を調整します。

南部式では、枝先から「かんざし」の出具合を慎重に調整します。

そして「ばち」を回します。北部式は

割り竹が横から見て8の字を描くように、南部式はシュロ縄で弧を描くように回していきます。北部式の「ばち」と「かんざし」の結束の際には、竹の先端の割れ止め加工の方法、また熟練技能職員の技能に受け継がれた細かい手法も確認しました。

次に、見せ場となる吊り縄の振り下ろしです。丁寧に四方に割り振つ



浜離宮恩賜庭園



旧芝離宮恩賜庭園



小石川後楽園



六義園



向島百花園



清澄庭園



旧古河庭園



旧岩崎邸庭園



殿ヶ谷戸庭園

図8 都立9庭園の門松

て、吊り縄の間隔を調整することがポイントです。技能職員の間で「雨がふってるよ」という言葉が使われていましたが、これは吊り縄が中心から四方にきれいに下りていない状態をさしており、このような用語をメモとして記録しました。「吊り縄」と「ばち」を「うのくび」で仕上げ止めます。南部式のほうは弧を描

くように最後の調整をします。これは吊り縄を強く引っ張ると弧がどんどん上がっていくので、こういった最後の調整をします。

そして最後に吊り縄の処理として玉止めをして完成です。

様式の発祥と広がりについて、ヒアリングして分かったことは、北部式は六義園が発祥であるということ。それは、昭和30年代、実際に北部式を製作した人にヒアリングしてわかりました。南部式は日比谷公園

から始まり、徐々に変化していったこともわかりました。古写真の日比谷公園の雪吊りを見ると、確かに南部式の雪吊りが見られました。

その後、北部式、南部式雪吊り共に民間に伝わっていきます。浜離宮恩賜庭園では、緑化業関連団体の研修が行われており、都立庭園の北部式、南部式雪吊りの研修を受けた方がその手法を持ち帰ったことにより、都内の施設で北部式、南部式雪吊りが広まったと言われています。

先輩技能職員に聞

くところによると、

北部式の雪吊りは化粧ではあるが無理のないように美しく見せること、南部式では、吊り縄の中に枝がすべて収まる状態のことを「鳥かご」といって、よくない状態であることなど製作時の留意点などがわかりました。様式美についてはかなり注意して伝わっていったようです。

門松

都立9庭園では、



図9 門松 そぎ(左)とずんどう(右)



図10 正月飾り ご利益花壇(六義園)

正門の前に門松を飾っています(図8)。門松とは、新年の季語であり、古くは、木の梢に神が宿ると考えられていたことから、年神を家に迎えるための依り代という意味があります。正門にはしっかりとした門松を飾りますが、その他の門にも1本の松を飾ります。

門松は、竹の切り口を斜めにする「そぎ(削ぎ)」と水平にする「ずんどう(寸胴)」の2種類(図9)があり、都立庭園ではどちらも採用しています。

門松には長さの異なる3本タケが

使われていますが、その配置によって意味合いが違ってきます。

竹の配置方法には、「出飾り」と「迎え飾り」があります。共に中央に一番背の高い竹を置き、門や玄関に対して外側に2番に高い竹を置くのが「出飾り」、内側に置くのが「迎え飾り」です。「出飾り」は、お子様の独立祈願とか、結婚祈願の気持ちを表しているということで、一般家庭でよく飾られています。

「迎え飾り」はお客さまに入ってきて欲しい時などや福を呼び込むという意味を込めて、百貨店など商業施設で飾られている様式で、都立庭園でも「たくさんお客様をお迎えします」とのことで、この様式を採用しています。

正月飾り

ウエルカムスポットにお客様が写真撮影する場所として設えをしています。

六義園では「ご利益花壇」と名付けて、扇形に敷松葉を敷いてその中に植物を植付けて(図10)います。年々グレードアップしており、五輪開催の年には五輪を意識した俵もつくりました。

寒牡丹の冬囲いは、最近は設置できていませんが、以前は、上野東照



図11 献上七草籠(向島百花園)

宮でも見られるような「ワラボツチ」で冬囲いをしていました。

また、稲わらを使ったわら細工で一輪挿しやフクジュソウなどを作つて飾ります。正月は花が少ない季節ということもあり、フクジュソウを見立てたわら細工を飾っています。つばみから5分咲き、満開を表現しています。

向島百花園では、毎年春の七草を植え付けた「七草籠」を作っています。それぞれの七草は、バックヤードで育てるところから行っています。皇室へは「献上七草籠(図11)」として贈らせていただいています。献上七草籠は、「毎年楽しみにしていますよ」とのお言葉も頂戴するほど立派なものです。皇室へ送り出す

まで門の前に置いてお客様に見ていただいています。

設えと取り外し時期

設えれば取り外し作業があります。「こも巻き」は霜降から啓蟄まで、「雪吊り」は大雪から春分までとしています。

「門松」は12月28日までに設えをしています。29日は「にじゅうく(二重苦)」と読めて忌み嫌う語呂合わせで、また、29日から休園に入りますし、31日も一夜飾り、と言われて嫌厭されますので、28日までに設えています。

取り外しは小正月(1月15日)の夕方に行っています。1662(寛文2)年、江戸幕府は正月7日限りで、松飾りを取り払うことという令を出しています。正月飾りが火事の原因となることが多かったため、早く取り払うようにということで、御触れが出たということです。

これに倣うと本来都立庭園では松の内(1月7日)で片付けるところではありますが、成人式を迎えた方が記念撮影に来園され、門松は人気の場所であることから、都民の方に親しまれる庭園としては1月15日の取り外しとしています。

伝統技能の発信について

伝統技能見学会では、雪吊りの振り下ろしの作業を解説付きでご覧いただいたり、吊り縄に触ったり、結んだりという体験イベントを行っています。

現在、コロナ禍で伝統技能見学会の開催をひかえており、代わりに定点撮影によるタイムラプスを活用しています。昨年度は清澄庭園では南部式、六義園では北部式と南部式の雪吊り制作の様子をツイッターで発信しました。タイムラプスは若者の興味をひき、このような動画配信は大変反響があります。

旧古河庭園と浜離宮恩賜庭園ではYouTubeで動画配信しています。ツイッターフォロワー数では、旧古河庭園は2万人、六義園は1万人を超えています。ツイッター、SNSやタイムラプスで発信すると、視聴回数が2万回、4万回を超えることもあり、影響力があると感じています。

以上、「都立庭園の冬支度の意匠について」紹介いたしました。

図・写真：特記以外、東京都公園協会提供

(図中の表記は提供のままとしています)
※講座途中で、「雪吊り」の動画解説の映像が流されましたが、ここでは省略しました。

※全国各地の「庭園の冬支度」の情報(写真など)を募集します。詳しくは最終ページをご覧ください。

春を迎えるための造園文化

藤田 隆司



(京都府)

1979年生まれ、愛媛県出身。好きな庭園…光明禅寺(福岡県)、臥龍山荘(愛媛県)、法然院。雪が積もっている庭を見ると一番に飛び込んでくる人工物、その美しさにひかれ、いつかは…と思っています。温暖な地域で生業をしている自分にとって、実践することの無い雪吊りについて話が聞けると知って、直ぐに申し込みました。

「都立庭園の冬支度の意匠」と題して、東京都公園協会の北村葉子講師の講演で、都立公園の紹介から始まり、あらためて東京都にも多くの庭園が残されていると再認識致しました。霜除けは古くからあることや雪吊りは意外にも明治期からのものであったりと、歴史も知り、己の勉強不足に目を逸らしたくなると共に、今後の作庭や育成管理をしていく中で活かして行きたいと思いました。また、樹木を守るためという実用的なところに美も含まれており、先人の想いが受け継がれてきたもので、春を迎えるために行われてきた文化でもあったと感じました。

長尾欽弥・よね夫妻と日本庭園協会のおもてなし 「米国ガーデンクラブを歓迎す」

広報委員

はじめに

前号（108号）の「現代日本庭園の巨匠・岩城亘太郎」で岩城亘太郎作庭の長尾欽弥本邸（宜雨荘・別邸（扇湖山荘と隣松園）の写真^{（註1）}を紹介した。

長尾欽弥という人物は、「わかもと製菓」の創業者で、菓で儲けた大金持ちといういわゆる成金としてのイメージが強かった。しかし、亘太郎との関わりを知るにつれ、造園家岩城亘太郎にとってのキーマンというだけではなく、庭園文化の上でも何らかの貢献をした人物ではなかったか、そんな思いがわいてきた。そこで、多くの来訪者が写る「隣松園」の写真に着目し、庭園を介した長尾欽弥・よね夫妻のおもてなしについて探ることにした。



図1 稲葉氏(左)と代表のジェラルディン・カートメル氏(右)

隣松園のおもてなし

残された多くの写真の中でも、特に外国人が写る写真が4点ある。図1から3の写真は、訪問の礼状に同封されていたもので、次のことが推測される。

宛名は、「稲葉様」とある。おそらく、訪問時の隣松園側の担当者であろう。差出人は、ジェラルディン・カートメル氏。訪問したのは、彼を代表とする「米国およびカナダハイスクール教員団体」である。日付は1938（昭和13）年8月4日。訪問はそれより数日前か。礼状はもちろん英文だが、和訳^{（註2）}も同封されている。それを要約する。

・長尾氏の別荘では心のこもったおもてなしを受け、楽しい思い出と



図2 日除けの下で茶菓のおもてなし

なった。

・楽しくて美しい別荘、気持ちの良い部屋、珍しい古樹、石灯籠、今を盛りに生育する木々、蔓草、芝生、夏の日に光る水辺。さらに屋外のテラスでは茶菓をいただき、忘れることのできない楽しい思い出となった。

・モーターボートにより上陸と同時に差し出された日傘は我々には珍しいものだった。団員のある者は今も大切に持っている。

ボートによるアプローチはユニークで湖畔にひろがる松林やのびやかな芝生地が多くの来訪者を受け入れる魅力を持った庭園であったということも然ることながら、おそらく姿を見せなかった別荘の主人の心のこもったおもてなしが、来訪者の心に残っただろうことがうかがえる。

図4は、外国人の中に学生服姿などの日本人も混じる大集団の記念写真である。これは、「昭和十五年七



図3 日傘をさす団員

月二十三日 記念撮影 長尾隣松園」と表書された封筒に収められていたことから、その日の訪問であろう。しかし、この写真については、これ以上の情報はない。

この2件の外国人が来訪した頃の日本は、政治的には戦争に突き進む激動の時期である。その一方で、隣松園では、外国からの来訪者を、モーターボートで迎え入れ、和傘や茶菓でもてなしている。市民レベルでは、平和で友好的な交流があったのであろう。

米国ガーデンクラブの来園

実は、隣松園ではこれより前の1935（昭和10）年に「米国ガーデ



図4 昭和15年来訪の団体



図5 長尾欽弥(左)・よね(中)夫妻
会長バークレイ夫人(右)



図6 楽焼を楽しむ一行



図7 湖畔デッキで釣りに興じる



図8 京都から呼んだ舞妓と
羽根つき



図9 舞妓と散策

ンクラブ（以降、クラブ）（註³）の一行をもてなしている。

「米国庭園倶楽部代表 訪日記念写真帳（註⁴）」に隣松園での様子が残されている。

図5は、邸主の長尾欽弥・よね夫妻とクラブ会長ジョナサン・バークレイ夫人がおさまっている。

他には、楽焼や釣りを楽しむ様子（図6、図7）、日傘や着物姿（図8、図9）など「日本らしさ」によるおもてなしの雰囲気が漂っている。

この日の様子は、1935（昭和10）年5月27日付けの「京都市出新聞」の記事にある。

アメリカ・ガーデン・クラブ員一行64名は五月晴れの26日正午京津国道をドライブして大津柳ヶ崎琵琶湖ホテルに入り、昼食後は滋賀県特産の美術工芸品の物珍らしげに見入り、湖畔の波打ち際で石投げやカメラなどで嬉々として楽しみ、午後二時半相前後してモーター船「わかも

と号」などで数寄を凝らした唐崎のわかもと本舗長尾欽弥氏別邸に入り湖辺の庭園で京都からの舞妓、美妓等と羽子つき、まりつき等に打ち興じ、楽焼や薄茶に東洋趣味を満喫し、同三時過ぎに長尾氏夫妻のティー・パーティーの歓待を受け、午後五時一行は京都の宿舎に引き上げた。

日本的な演出でのおもてなしの様子があがえる。

後に、この時通訳として同行していた白洲正子が「女傑（註⁵）」に書いている。

アメリカのガーデンクラブという金持ちの団体が来て、私も通訳にやとわれて、方々ついて廻ったが、琵琶湖のほとりのある大きな別荘に招かれたことがある。よく覚えていないが桂離宮みたいな建築で、芝生が湖水までのびのびと展けているのが気持ちよかった。聞く所によれば、わかもとさんの別荘ということだ

が、誰に聞いても何者だかわからない。どれが御主人なのか紹介する人もいない。さんざん御馳走になっておいて、それはあんまり美味しいと思われるような無視のされ方だった。

クラブ一行が隣松園を訪れたのは、5月15日（月）に日本郵船「秩父丸」で横浜に入港してから13日目の5月26日（日）である。来日初日は三溪園、翌日から東京、日光、名古屋、京都の庭園を巡ってきた。その間、歓迎会、能や舞の鑑賞会、お茶や生花などの講習会など盛りだくさんのメニューをこなしてきた。

そこへ、モーターボートで上陸という演出である。ひろびろとした湖面にむかって伸びやかに広がる芝生の庭園は、それまで見てきた庭園とは一味違った趣を感じたのであろう。

白洲が言う、邸主がわからないというのは、「主役は皆さまです。存分に庭園を楽しんでください」という長尾夫妻なりのおもてなしの流儀

ではなかったかと思う。細やかな配慮でおもてなしの差配をしたのは、欽弥というより妻のよねであったろう。よねは、世話はするが表に出るのは好まない（註⁶）という人だったようだ。そうだとすると図5は、貴重な一枚である。

日本庭園協会のおもてなし

さて、来日した「米国ガーデンクラブ」とは「全米各地の婦人社交界を牛耳る奥様、お嬢様の一行114名（註⁷）」で、98名の婦人と16名の紳士の構成である。構成からも女性中心の社交クラブであることがわかる。一行のほとんどは日本をよく知り日本式の庭園を持っていて、バークレイ会長に至っては、リッチモンドに4つの庭園をもっている（註⁸）そうだ。

一方、受入側は寺社庭園以外の多くが当時の富裕層に流行していた邸宅、別荘の庭園であった。その庭園の主は、政治家か実業家である。

日本庭園協会初代会長本多静六はアメリカのガーデンクラブを「歓迎できる庭も持たないでは会長の資格がない」と会長職を財界人藤山雷太に委ねた(註9)。藤山雷太郎(註10)でのおもてなしは『庭園と風景(註11)』に詳しい。

クラブ一行が藤山邸を訪れたのは、日光旅行をおえて再び東京に戻った5月19日(日)の午後のこと。

この日は単に庭園見学とか、宴遊会という様な意味のものではなく、当協会が一行を歓迎する会で、多くの会員が出席した。藤山会長の歓迎の

辞、牛窪東京市長の挨拶があり、旅行中に任期を終えた前会長パークレー夫人、新会長ファイフ夫人及び牛窪市長が日本庭園協会の名誉会員に推戴されるというセレモニーが続いた(図10、11)。

その後は、いろいろ趣向の変わったおもてなしが用意されていた。会長令孫による日本舞踊(図12、13)



図10 歓迎挨拶を述べる藤山雷太会長



図11 挨拶を述べるパークレー女史



図12 藤山雷太会長令孫の舞踊



図13 観覧席の一行



図14 会場の様子

に始まり、田舎家で催された盆石の実演、日本の草花に関する古書の陳列、木陰に設けられた様々な模擬店では桜湯、蘭湯などがふるまわれた(図14)。その味は珍しく、その上品さが好まれたとある。

園内では、庭園中央の芝生、小暗い木立、三笠亭、石門、坂道、そして農家の庭が展開する散策を楽しんだ。筆者は、さっぱりとして何の技巧もない庭園を好ましく思った人もあったと記している。

おわりに

帰国後、クラブ一行の一人フレック・デュー・デヤルヴィス夫人が連合新聞に寄稿した日本印象記(註12)を紹介しよう。

この極東国は世界稀な美しい国である。

この旅行を通して如何に鄭重に親切に歓迎されたかは感謝の辞もない

ほどである。日本人は自分達の国の山水の自然美を如何に楽しむかを知っている。

私は、もっとアメリカ人も庭園を愛するものは日本を訪問せんことを希望する。あれほどちっぽけな地所しかない庭園でありながら、日本人の造園術が如何に発達しており、ただ単に一見してさへも全く深い美の意識に驚嘆のほかない程度にまで感動させる日本人の鑑賞の深さに関心せざるを得ない。

この記事はセンセイションを起こしたとあることから、クラブ一行の後に隣松園を訪れた前述2件の団体訪問にも、その影響があったのかもしれない。

いずれにせよ、第二次大戦の直前、庭園を介したおもてなしが、日米友好の交流を深める重要な役割を担ったことは確かであろう。

(文責…小沼康子)

註1…長尾資料館で管理されている。長尾資料館とは、長尾欽弥の別邸、鎌倉の扇湖山荘に残された書簡や写真等資料を管理している。(図14は長尾資料館提供)

註2…礼状には名刺「公使館一等書記官 小川昇」が同封されていることから、訳文は小川氏によると推測される。

註3…創立は1913年。ゼイ・ウィリス・マーティン女史がアメリカ国内の13のガーデンクラブを全国団体として結成。目的は庭園の知識・関心を普及することなど。来日時は、105団体、約7000人の会員を有していた。『庭園と風景』第17巻第6号、日本庭園協会、1935年

註4…米国家庭園倶楽部招待委員会編『米国家庭園倶楽部代表訪日記念写真帳』、1935年「米国家庭園倶楽部」の来日は、日本の文化を外国に紹介して、国際文化の新興に貢献することを目的として1934(昭和9)年に設立された「財団法人国際文化振興会(現、国際交流基金)」の招待により実現した。招待に当たって、「米国家庭園倶楽部招待委員会」が設けられた。

註5…白洲正子「女傑」『小説新潮』13(3)、『新潮社』、1959年2月

註6…同右

註7…大阪朝日新聞、1935(昭和10)年5月14日

註8…京都日出新聞、1935(昭和10)年5月14日

註9…龍居竹之介「庭と二人三脚、日本庭園協会の一世紀」『日本庭園協会創立百周年記念誌』(一社)日本庭園協会、2018

註10…白金台地に位置する。現、シユラトン都ホテル東京の敷地

註11…Y・S・Y「米国家庭園倶楽部一行と東京の庭園を見学して」『庭園と風景』第17巻第6号、1935年

註12…「ガーデンクラブの日本観」『庭園と風景』第17巻第12号、日本庭園協会、1935年

はじめに

この度、以前より設立準備が進められていた「欧州日本庭園協会 (European Association of Japanese Gardens)」の設立総会が、フランス・モレヴリエにて2022 (令和4) 年6月1日 (水) 9時~12時に開催されました。日本においては、サテライト会場としての日本会場が同日同時時間帯 (日本時間16時~19時30分) に設営され、日本側関係者が一堂に会して設立を支援しました。日本会場は、東京農業大学グリーンアカデミーに設けられ、オンライン配信され、日本からも多くの参加がありました。

日本庭園協会としても、「欧州日本庭園協会」の設立は大いに歓迎すべきことで、今後何らかの関係を持ち、協力関係を築いていきたいと考えています。

ちょうど、フランス会場での設立総会参加とヨーロッパの日本庭園事情の視察及び管理技術者との交流を含む内容で、全国一級造園施工管理技士の会 (以降、一造会) が企画したツアーがあったので参加を決めた

した。

ここでは、総会の様子とその前後で参加した視察や交流の様子を報告します。

設立総会の概要

フランス会場で行われた設立総会では、定款、役員、理事会の設定等が付議されました。会長には Jean-Pierre Chavassieux 氏 (元モレヴリエ議長、元モレヴリエ東洋庭園運営責任者) が、副会長には Diane Crawford 氏 (Japanese Garden Society) / Per Hundevad Andersen 氏 (Denmark Association) Joseph Grimaldi 氏 (AFJJ) らが、それぞれ



図1 設立総会・フランス会場の様子

れ選任されました。その間、日本会場では、東京農業大学国際日本庭園研修センター長の鈴木誠 東京農業大学名誉教授による講演が行われました。

来賓として、フランス会場 (図1) からは、伊原純一氏 (駐フランス日本国大使)、ジャン・マルク・エロー氏 (元首相、元外務大臣) が、日本会場 (図2) からは湯澤将憲氏 (国土交通省都市局公園緑地・景観課緑地環境室長) が祝辞を述べられました。関係団体として、当協会から高橋康夫会長が祝辞を述べ、国際活動委員として山田拓広、星宏海、細野達哉らがそれぞれ挨拶をいたしました。



図2 日本会場の様子

ました。引き続き、フランス会場においては会食を含めた情報交換会が行われ、ヨーロッパ各地から集まった各国の日本庭園協会の方々と交流を深めることができました。まだヨーロッパにおいては言語の壁もあり、すべての国々においての参加が実現されていない状態ではありましたが、これからヨーロッパ全体と情報共有をできる場として発展して行けると感じました。昼食後は駐フランス日本国大使の伊原純一氏を今回の旅行の団長である藤井英二郎千葉大学名誉教授が園内を案内 (図3)、庭園の歴史や前日に行ったワークショップの内容等を解説されました。

日本会場では参加者によって情報



図3 モレヴリエ東洋庭園 伊原純一大使を案内する藤井英二郎千葉大学名誉教授 (中央)

交換会が行われました。

この欧州日本庭園協会設立総会に参加したことは、当協会が国際交流を進めるための第一歩に、また今後の欧州における日本庭園のさらなる発展のきっかけになったと確信しました。

モレヴリエ東洋庭園

設立総会の会場となったモレヴリエは、メーン・エ・ロワール県シヨレ市の近郊に位置する小さな町です。ここにはヨーロッパでも最大規模の古い日本庭園「モレヴリエ東洋庭園（図4）」があります。

1900年のパリ万博にて日本式五重塔（ベルギー国王のラーケン宮苑に現存）を設計したフランス建築家アレキサンドル・マルセルの設計で1899年から1913年にかけて整備が行われました。面積約28ヘクタールの庭園で、敷地内に流れるモワンヌ川を人工的に堰き止めて作った池を中心とした回遊式庭園



図4 モレヴリエ東洋庭園

です。1981年からは国の援助も受け、園地の修復作業も行われ、1985年より市営の有料公園として一般公開に至っています。現在は園内にカフェや盆栽展示販売所等も設置され多くの観光客でにぎわっています。

日仏技術者交流

一造会が企画した今回のツアーは、欧州日本庭園協会設立総会への参加のみならず、日仏技術者交流も大きな目的の一つでもありました。

ツアーは、5月28日（土）から6月5日（日）までの8泊9日の日程で「知られざるフランスの造園・ラ



図5 ヴェルサイユ宮殿の整形式庭園

ンドスケープを学び現地の技術者と交流。歴史・人・文化の深淵に迫る」というコンセプトのもと、現地フランスで庭園管理をされている方々と一造会のメンバーとが交流を行うことを目的とし行ったものです。次に視察・交流の概要を報告します。

○5月29日（日）・ヴェルサイユ宮殿

フランスを代表する整形式庭園（図5）部分の大庭園直営庭師やトリアノン庭園直営庭師の方々の案内で園内を巡り、今後の庭園の展望や実際の樹木の管理方法等を伺うことができました（図6、7、8）。

○5月30日（月）・モレヴリエへ移動



図6 ヴェルサイユ宮殿 直営庭師の方々の案内で園内を巡る

○5月31日（火）・欧州日本庭園協会設立に伴う国際ワークショップに参加

午前中に「庭園空間構成の理解と庭木の剪定」をテーマに、総会参加者らが質問を投げかける中、現地の庭師と庭園空間構成についての意見交換及び共同での剪定作業を行い、互いの技術交流を図りました（図9）。



図7 ヴェルサイユ宮殿 庭園の展望など説明をうける



図8 樹木の管理方法を聞く



図9 モレヴリエ東洋庭園 日本の技術について説明する筆者

続いて午後は「景石の扱い方、据え方」といったテーマを設定し、前日の下見を経た現地の石材を用いて、園内の一部で講習を行いました（図10）。

こちらもモレヴリエのガーデナーと共に目的、選び方、据え方について一石ずつ検討を行い、より深い理解醸成を図りました。

○6月1日（水）・設立総会参加

○6月2日（木）・ナント市

ナント市職員のアーボリストと呼ばれる高い木の剪定やメンテナンスを専門とする特殊作業員を対象とした街路樹（マツ）の半日剪定講習を行いました（図11）。続く午後にも同市ヴェルサイユ島の日本庭園内に



図10 モレヴリエ東洋庭園 現地の石材を用いた石組講習

て庭園視察後、意見交換及び剪定講習を行いました。

○6月3日（金）・パリ市

アルペール・カーン庭園（図12）

において剪定講習を実施しました（図13）。午後からはパリ郊外にある緑の里と呼ばれる庭園を視察しました。園内の日本庭園は、1889年のパリ万博における日本庭園の作庭者畑和助の作庭によるものです。庭園は荒廃した部分がありましたが、古写真と比較しながら作庭時の様子について意見交換しました。

おわりに

今回の視察・講習を行った庭園は、自治体主体で管理する公共庭園であったということを考慮すると、



図11 ナント市にて マツの剪定講習 説明は筆者

日常管理においてガーデナーは樹高2m程の範囲での作業に限られ、それ以上の大物は外注して管理を行っていることは日本同様でした。一方で、パリのプラタナスやヴェルサイユ宮殿の整型式庭園等に見られる整然とした刈り込みは毎年管理が行われるものの、自然樹形の樹木に対しては特別管理を施す認識がないことに日本との違いを感じました。

また15mを超える街路樹等に対しては、アーボリストが枯れ木の除去や樹木の健康診断等の管理を行い、安全を担保する仕組みが構築されていることで、日本にはない樹高の高い並木がヨーロッパで多く用いられる要因である、とも感じました。

今後ヨーロッパにて日本庭園の管理を手掛けるためには、日本で中木



図12 アルペール・カーン庭園



図13 アルペール・カーン日本庭園 剪定講習

域にあたる2mから15mの樹木を用いた庭園の管理作業が大きな課題であり、さらなる意見交換の必要性を強く感じる研修旅行となりました。

（理事 国際活動委員長）

1. 本部委員会								
総務委員会	委員長	加藤 精一	財務委員会	委員長	加藤 新一郎			
広報委員会	委員長	小沼 康子	鑑賞研究委員会	委員長	菊地 正樹 ☆			
技術委員会	委員長	廣瀬 慶寛	国際活動委員会	委員長	曾根 将郎 ☆			
2. 特別委員会								
文化財指定庭園調査委員会	委員長	高橋 康夫						
日本庭園協会賞選考委員会	委員長	高橋 康夫						
日本庭園協会賞選考規定検討委員会	委員長	高橋 良仁						
日本庭園協会創立 105 周年記念事業委員会	委員長	加藤 精一 ☆						
3. 支部								
北海道南支部	支部長	桃井 雅彦	宮城県支部	支部長	竹田 利光	栃木県支部	支部長	清水一樹
茨城県支部	支部長	飛田 幸男	埼玉県支部	支部長	山田 祐司	千葉県支部	支部長	岩崎 隆
東京都支部	支部長	鈴木 康幸	神奈川県支部	支部長	米谷 拓未	新潟県支部	支部長	小林 紀昭
石川県支部	支部長	宮本 広之	静岡県支部	支部長	伊久美 和秀 ☆	愛知県支部	支部長	高見 紀雄
近畿支部	支部長	山田 拓広	岡山県支部	支部長	三宅 秀俊	広島県支部	支部長	藤原 忍
鳥取県支部	支部長	石亀 靖	鳥取県支部	支部長	仲佐 修二	山口県支部	支部長	殿井 正敏
四国支部	支部長	米谷 進吾 ☆						

本部委員会の運営方針と委員

	運営方針	委員（◎委員長 ○副委員長）
総務委員会	100 年を超える庭園・造園関係の最古の団体として、庭園文化を後世に残すため、各委員会及び支部との連携を深め、協会運営を円滑に進めていく	◎加藤 精一 秋山 広道
財務委員会	会員の会費で運営されており、各委員会には予算を事前に提出していただき実りある活動をしてほしいと願っている	◎加藤 新一郎 岩崎 隆 北村 均 清水 一樹 廣瀬 辰臣
広報委員会	会員にとって有益な情報の受発信に努める。庭園文化にとって貴重な情報や資料の収集、蓄積を行い、随時公開する。また、会員一人ひとりの活躍を紹介し、会員相互の交流の場を提供する	◎小沼 康子 ○内田 均 酒井 和佳子 中山 なつ希
鑑賞研究委員会	創立百周年記念事業 清澄庭園再評価プロジェクト「清澄庭園を国指定名勝にする」の実現のために、清澄庭園の見学会を行い、より多くの会員に清澄庭園を理解してもらう	◎菊地 正樹 野村 ゆみ 本多 紀彦 横尾 浩行
技術委員会	庭園・公園・園芸・風致などの維持・発展に関する技術の研究を推進し、文化財庭園などの調査及び修復に寄与する。並びに研究会・講演会・講習会・見学会を開催する	◎廣瀬 慶寛 清水 哲也 由比 誠一郎
国際活動委員会	パリ万博以降、海外における日本庭園の文化が広がり、現在においても多くの需要がある。会員の皆様に海外の動向を理解していただけるよう情報発信する	◎曾根 将郎 内山 貞文 星 宏海 細野 達哉 山田 拓広

本部・委員会からのお知らせ

総務委員会

●龍居竹之介名誉会長のロングラン講演会を開催しています。第1回…5月18日（水）「はじめに／いまの庭の素性を見つめなおす」、第2回…6月15日（水）「第2次大戦中、戦後の庭と暮らし」が盛況のうちに開催されました。本講演会は来年3月まで全10回です。

技術委員会

●第13回庭園技術連続講座・テーマ「庭に向かう私の姿勢」は、オンライン配信とし、全国から多くの会員の参加を得て順調に開催中。第1回…5月29日（日）講師・桃井賢二氏と第2回…6月26日（日）講師・木目田裕一氏は、それぞれに発想の原点や近作を紹介しました。講演後は活発な質疑応答が行われました。

国際活動委員会

●6月1日（水）、フランス・モレヴリエにて開催された「欧州日本庭園協会」設立総会に、曾根将郎委員長が出席しました。日本会場（東京農業大学グリーンアカデミー）からは、オンラインで高橋康夫会長が祝辞を述べました。詳細は本文を参照ください。

特別委員会

●6月19日(日)、北海道大学農学部にて開催された「日本造園学会全国大会」において、【日本庭園の「こころ」と「わざ」に関する研究推進委員会】は『日本庭園の「わざ」(伝承造園技術)』をいかにして継承し、未来へつないでゆくか?』をテーマに「研究推進委員会フォーラム」を行いました。会場から高橋康夫会長が「日本庭園協会における『わざ』の伝承」と題し、当協会における技術力を高めるための「わざ」を伝える仕組みとして、伝統庭園技藝、東日本大震災復興記念庭園築庭における実践に基づく技の伝承を紹介するとともに、技術を後世に伝える鍵となる記録保存の重要性等を話題提供しました。

さらに、オンライン参加の寺石隆一氏(日本造園組合連合会)と内山貞文氏(ポートランド日本庭園)の話題提供があり、栗野隆東京農業大学教授の趣旨説明及び司会により「わざの伝承」をテーマに総合討論を行いました。会場からは日本庭園の見方についての質問や意見がでるなど活発な討論が行われ、日本庭園における「わざ」をとおして、庭園の意義や価値を評価する機運が盛り上がりました。



国指定名勝 旧齊藤氏別邸庭園

旧齊藤家別邸ほかの見学と情報交換を行いました。詳細は次号に掲載予定です。

●第59回文化財指定庭園保護協議会

が、青森県弘前市において、6月23日(木)、24日(金)に開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響により3年ぶりの開催となりました。

1日目、総会と文化庁主任文化財調査官の平澤毅氏による「文化財庭園をめぐる近年の動向」、弘前市文化財保存技術協会の今井二三夫氏による「大石武学流庭園について」の講演が行われた。その後、全国で行われた懇親会では、全国の文化財指定庭園の関係者との交流、情報交換を行いました。

2日目は津軽地方で独自に発展した大石武学流庭園(瑞楽園、須藤氏庭園、成田氏庭園、丹藤氏庭園、對馬氏庭園、揚亀園)を見学しました。

新潟県支部・本部共催

7月2日(土)、3日(日)、新潟市において「新潟県庭園視察研修会」が開催され、新発田市の清水園、新潟市内の北方文化博物館、燕喜館、

東京都支部総会

6月25日(土)、東京都支部は国立市第5池田ビル会議室において、2022年度の通常総会を開催しました。2019～2021年度活動報告及び収支決算報告、2022年度支部活動計画、支部規約制定の件等を賛成多数で可決するとともに、支部長以下の執行部役員を選出しました。選出された鈴木康幸支部長のもと、新たに制定した規約にもとづく新体制により、さらなる飛躍を目指し活動を開始しました。

宮城県支部総会

6月26日(日)、宮城県支部は(有)庭正庭芸研究所 ふれあいパークにおいて臨時総会を開催しました。開催に先立ち、来賓の高橋康夫会長の『日本庭園協会「わざ」と「方針」について』の基調講演が行われ、引き続き総会に移り、2022年度支部活動方針、伝統庭園技藝「高木枝打ち講習会」の実施、2023年4月23日(水)から6月18日(木)に

仙台で開催予定の第40回全国都市緑化仙台フェア庭園出展等について提案があり、審議の結果了承されました。その後新役員が紹介され、竹田利光支部長のもと、新旧役員が一体となった新体制が発足し、さらなる発展を目指して活動を開始しました。

「日本各地・庭園の冬支度」の写真を募集

本号で紹介した「都立庭園の冬支度」を受け、日本各地の「庭園の冬支度」の写真を募集します。掲載は111号(2023年・新年号)の予定です。地域色あふれる冬支度や自作の門松などの写真と解説をお寄せください。季節はまだ先ですが、「写真送るよ」という方は、まずは協会事務局宛にエントリしてください。詳細は別途お知らせします。

新入会員・氏名(住所)

(2022(令和4)年4月1日から6月30日入会)
田中宏(茨城県)、荒井恒介(神奈川県)
川原(入会順・敬称略)

編集後記

★巻頭言の中村寛氏は、「雑木の庭」の創始者飯田十基のお弟子さん。以前拝見させていただいたお庭も「雑木」が主役。20年近くたっても軽やかな佇まい。手入れのわざに感動しました。
★「みんなの緑学」の文字起こし、校閲共に、内田均と小沼康子が担当。
「都立庭園の冬支度」の文字起こしは、鈴木貴博氏と酒井和佳子、校閲は小沼康子と内田均が担当。

編集担当…小沼康子／内田均／中山なつ希
／酒井和佳子
本文デザイン…由比まゆみ